

井上ひさし著の『握手』という作品を読んだことのある方は多いと思う。私は中学生の頃にこの作品に触れた。触れたと言っても、学校の教科書で扱われていた作品ということで、教科書に取り上げられていたごく一部分のみを読んだに過ぎないのだが。

私は、この作品に他の教科書作品とは違った印象を抱いている。あるいは因縁、とも言えるかもしれない。それは良い印象とは言いがたいし、だからといって決して悪い印象ではない。その理由は、実は文章の内容に起因しているわけではなく、あくまで個人的なものによる。

『握手』の中で最も印象的と思われる場面がある。上野公園に古くからある西洋料理店（これはほぼ間違いなく精養軒のことである。）で、ルロイ修道士と呼ばれる老人と、彼が園長を務めていた児童養護施設にやって入っていた「わたし」が久々に再会し、向かい合って食事をするシーンだ。ここで二人は養護施設時代の昔話に興じる。今読み返すと、この昔話というものが、なかなか味の深いもののように思える。優しさや強さを兼ね備えていながらも、戦時中、外国人であったがために兵隊たちからは社会的弱者として扱われていたルロイ修道士。彼の達観と信念。この物語のテーマは、なかなか一つに絞ることが難しい。強いて言うならば、修道士彼自身である。それ以上に追求する必要は、少なくとも今ここではない。

私がこの作品に対して抱いている因縁というのは、いたって単純なものだ。『握手』は私が中学校の国語の授業で習った作品だった。当然定期試験でも扱われた。自慢になってしまいが、私は当時、国語という教科書に関しては絶対的な自信を持っていた。「作者の気持ちを考える」のが得意だったのだ。私には、基本的に読解で解けないという

問題はなかった。はずだったのだが。

そんな私が全く解答に困った問題が、ある時の学校の定期試験で出題された。その時の出典が、つまり『握手』だったというわけだ。

左の文章を読んで頂きたい。

「おいしいですね、このオムレツは。」

ルロイ修道士も右の親指を立てた。わたしは、はてなと心の中で首をかしげた。おいしいと言うわりには、ルロイ修道士に食欲がない。ラグビーのボールを押しつぶしたようなかつこうのプレーン・オムレツは、空気を入れればそのままグラウンドに持ち出せそうである。ルロイ修道士はナイフとフォークを動かしているだけで、オムレツをちつとも口へ運んではいけないのだ。（『握手』より引用）

その時の設問は『ラグビーのボールを押しつぶしたようなオムレツ』という比喻表現は、オムレツのどのような状態を意味しているか」というものだった。勿論、見てわかるように、本文中に解答の根拠はない。作問者は「自分で考えろ」と言いたかったのだろうが、私は結局、この問題には答えることができなかった。ちなみに模範解答は「オムレツのふっくらして美味しそうな状態」というものだった。しかし私は、その解答を知らされても、どうにも納得がいかなかった。というのも、当時の私には、いわゆる食のステレオタイプが欠如していたらしかったのだ。食には一定のステレオタイプがある。勿論、食に限った話ではないが、こと食に関する面では特にその気が強いように思われる。食は文化を代表する要素、であるからだろう。食を知るといことは、文化を知ると

いうことだ。そうやって言えばなかなか聞こえはいい。しかし、ステレオタイプという言葉が多くの場合でマイナスイメージを伴って使われるように、食に関する認識を固定化すると、当然どこかで不都合が生じてしまうこともあり得る。

私が先ほどの国語の問題にやられてしまったことについて、少し言い訳をしたい。それは突き詰めると「オムレツ」という概念の話になる。難しくはない。イメージの問題だ。私にとつてのオムレツ観を形成したのは、私の祖母だった。

まだ私が小学生の頃だった話だ。私が祖母の家に遊びに行くと、祖母はいつも手作り料理を振る舞ってくれた。祖母の得意料理の一つにオムレツがあった。私は「オムレツ」と呼ばれて出された料理を何の疑問も持たずに「うまいうまい」と思いながら食べていたものだったが、今思い返すとそこにはちよつとした違和感があった。いや、実を言えば当時の段階から子供心ながら「何か変だな」と思うところはあったのだが、それはほとんど気にならない程度のものであった。むしろ、あの国語の問題にぶち当らなければ、いくら年月を過ごそうとも、私は祖母のオムレツに何ら懐疑を示すことはなかったと思う。

祖母のオムレツは、まず四角い。そしてしょっぱくて、少し焦げ目がついている。一口サイズで、白いご飯によく合う。パンとはきつと、相性が悪い。そう、はっきり言ってそれは、オムレツというよりむしろ卵焼きに近かった。祖母は料理としては卵焼きを作っておきながら、私にそれを「オムレツ」と言って食べさせていたのだ。

祖母は一言で言えばハイカラな人間だ。現代志向で、和洋の選択を迫られるとだいたいの場合、洋に流れていく。そういった性格が彼女の卵

焼きをオムレツに変えてしまったのかもしれない。けれども、原因というものはあまり重要ではない。祖母にとつてのオムレツは、その孫である私にとつてのオムレツでもあった。ラグビーのボール？ はてな。もちろん、私がステレオタイプ系のオムレツを全く知らなかったわけではない。しかし、そのステレオタイプばかりがオムレツの姿でないと思っていたのが、それまでの私の考え方だった。けれど、その考えは少ばかり世間のオムレツからはみ出してしまっていたようだった。試験の解答用紙のバツが、それを物語っていた。

今更私は試験の作問者に文句を言うつもりはないし、ましてやオムレツを「ラグビーのボール」と形容した『握手』の主人公に訝しい目を向けるつもりもない。ただ、得てして食べ物というのは、偏見の産物である。中華料理店で注文するラーメンと、都心の激戦区で提供されるラーメンは、決して同じようには形容できない。小学校の林間学校の最中に皆で作るカレーと、インド人が経営している店で食べるカレーは、それをカレーと一括りにしてもいいのかと思うくらいに、全く別の料理である。食に対して一つの見方しかできなければ、私たちは文化を見誤る恐れがある。

食とはつまり、偏見の共存なのではないか。「オムレツはオムレツだからオムレツなんだ。ラーメンはラーメンだからラーメンなんだ。カレーはカレーだからカレーなんだ」——なるほど、食べ物の名前は味覚に先立つくらいに、実は私たちに存在の主張をしているのかもしれない。私は祖母の卵焼きのような料理を未だにオムレツだと思っている。作手がオムレツと言っているのだから、オムレツ以外の何物でもない。ステレオタイプからはみ出したこういった認識は、もちろん世間で受け

入れられなくても自然だと思う。何と言っても、ただ私が勝手にそう思っているだけなのだから。

けれども、ステレオタイプがぶつかり合って均衡している場面も存在する。全く違った食を、同じ程度の割合で、同じ言葉で言い表している地域や社会がある。それは文化の対立なのか、共存なのか、どういう見方をすればいいかなどということに、私は答えを出すつもりはない。文化は伸長と淘汰を繰り返していく。その流れに食も巻き込まれていき、それ以上でもそれ以下でもない。

ただ、仮に「ラグビーのボール」のようなオムレツが美味しいオムレツのステレオタイプであるとしても、国語的な思考力がオムレツにそういったステレオタイプを求めていたとしても、私は祖母のオムレツをオムレツとして食べていた。それだけは紛れもない事実だった。

なぜならば、今ここで私がそう言っているからだ。

食べ物の名前を決める理由に、これ以上のもが必要であるだろうか。

(了)